

天變
奇談
地人之異

寺家洋學
子引

緒言
曾國
破滅
夢

某國母々某日不國家
此附説を唱之人民
家財賣却一皆

酒食遊真不費一懼々々々々其日或待一が

依然と一多猶平日然とて天と斯く一片の

寢を與へざる雖も皆自々家産破却



之が為り國家破滅に至る一と云ふは吾
はみ於てもはる耳目の慣れたる中此一度現
はるる時々種々附會乃妄説或唱ふるあり
是皆物理を知らざる故を察依りて今諸書
散見する處乃究理家天文家此説を纂輯して
孩童蒙女子も授け以て其惑を解らん固
く天邊地異乃真理如何も余を識る能はる

此書編輯も唯奇変小遇あり心乱るは
氣動る世俗の虚説も迷ふはを以て是なり
少く尚智識乃訂正完全の時を俟而已

明治癸酉五月

編者あるは

目錄

○天變の論

○日月出て復没し没し復出る事

○日月色と変を爲す事

○空中の種々此像成見る事

○蜃氣樓の事

○数日同時に出る事

○天よりの石乃隕る事

○天雲あわよく響鳴る事

○白晝の星の現はる事

○流星の事

○星の隕る事

○星の流動を爲す事

○北光の事

○日蝕月蝕の事

○日月地小落る事

○雲あくくく日光明と失ふ事

○火の雨乃降事

○夏雪此降る事

○天より種々の物降る事

一妖火の事

一日暈月暈事

一虹の事

此三條を初編珍奇物語小委一由て此

冊子ゆき之代略

一雷鳴の事

一雷避事

一彗星事

一龍巻旋風の事

此四條を究理物語とりし冊子小委一

由て今あれと畧

○地裂け或る陷る事

- 平地突出或る山島湧出る事
- 山移り或る嶋の動く事
- 地中より禽獸と生むる事
- 木化して石とある事
- 木伐て血の出る事
- 沸湯泉乃事
- 潮水の變
- 一 地震事

- 一 古井より火出る事
- 一 地中より火出る事
- 一 火球の事
- 一 火山乃事

此等の事柄は初編珍奇物語はもと究
 理物語乃中亦悉く因て出、み略を宜
 しく参考をすべし

○ 轆轤首乃事

○人面瘡の事

○男化して女と形する事

○啞乃事

目錄終

天變奇談卷之上 天の部

東江樓主人 纂輯

天變の論

往古より天変地異乃出や其記載せは書籍勝
と計ふべりくは益一太古乃史官の災異と記
せしる人君の徳は修久國家は慎しめん為め
先ん然るは戦國以来陰陽家の輩数々出て

天変 卷之上

変異ある毎小種々の壺説成唱へ私欲と謀り
 變異不應として吉凶禍福を定むる小至きり是
 故小見慣き体あはれ此一度現るる時ハ子小
 子成附けして種々の凶災成唱へ愚民等ら物の
 理と知らざるより怪と惑ひ且つ懼れ遂小民
 心動乱して是が為小國家の災禍と形る小
 中なり是皆人民の愚心より自ら起る禍あり
 且つ廣大無邊の蒼天をんぞ一邦は私をへき

小何とげ然し
 一國ふれを現
 されて他の國
 より見る小中
 ありて天変を
 らば兎も角も
 萬國同一小見
 る所の事成二



天定
 一
 二

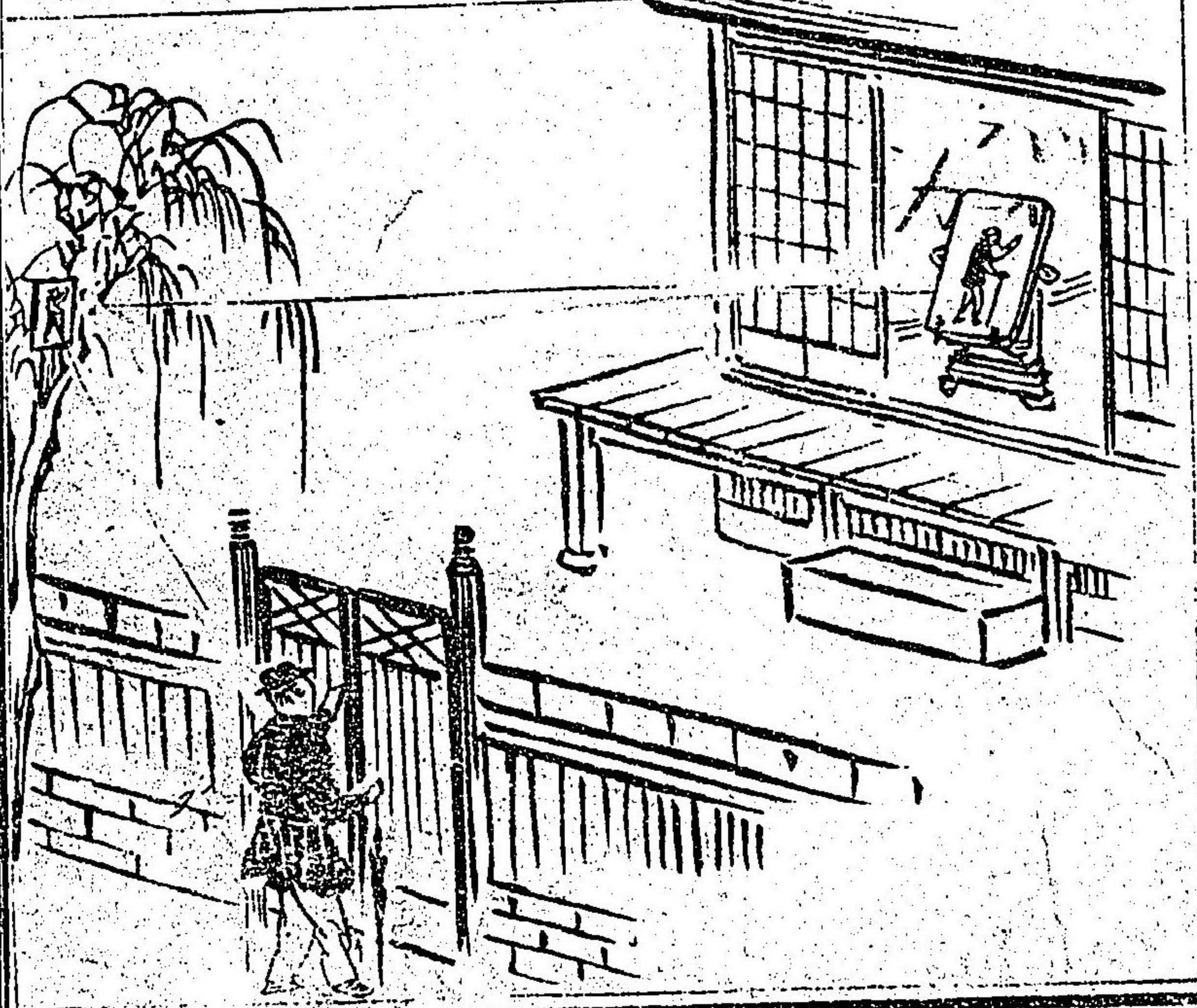
國一村小與り取つて禍祥哉論し吉凶を定む
る等実ニ笑ふべくまに憐むる今や開化の
秋小方り各々物理を考へ無因乃虚説ニ惑ふ
あや勿れ

○日月出て復没し没して復出る事

往古乃或書小日再ビ出テ再ビ没スレバ國軍
亡死ス主臣ニ降り天下亡ブあまのり又天
文総論あは月始テ出テ復没スル者ハ天下乱

あや、真也の記に色とも皆物理哉知と
さは臆断より出たるあやみて一も信ざるも
乃形し夫れ日月出て復没し或る日月二三体
同時ニ現き又る空中小船橋村家あど現ハ
と等空中乃奇変多くは初編珍奇物語の虹と
日乃暈月の暈此所あていへる如く空中の水
氣へ日光乃返照をより現はるを此あてし
も怪しむ不足とす○まづ鏡あて物成寫せば

其物皆鏡のちち
 小現色別小はこ
 鏡と以て合せ鏡
 乃如く相對せれ
 バ其物まこと之
 寓り千里乃遠き
 も之鏡引き目る
 直ちふ其物鏡見

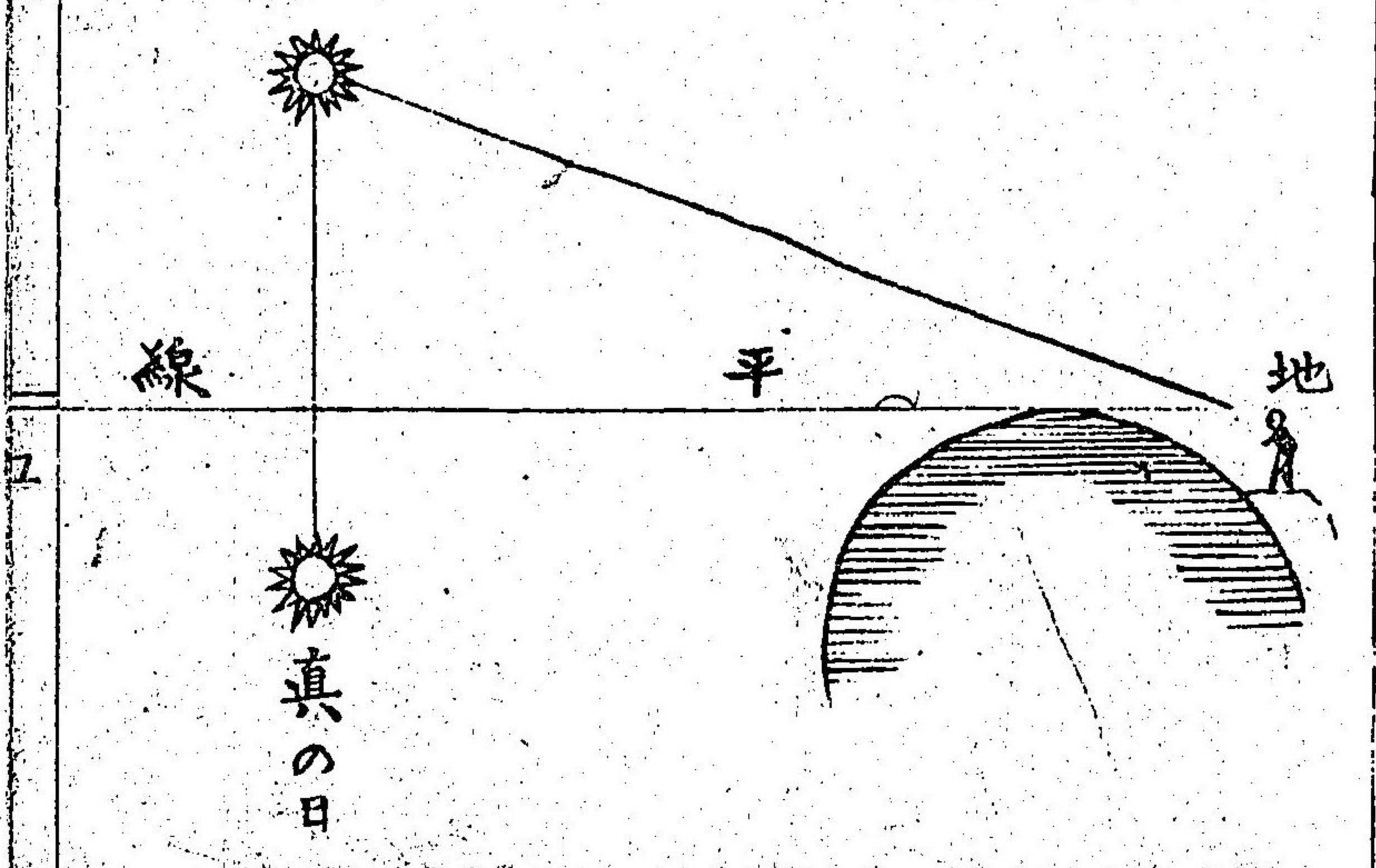


とて鏡小由てせれば見る事と猶目前に在
 るが如く或國の學者小客乃來て雜談し時刻
 成貴と成あし門を閉て客成去とつり其人
 と擇びて面會せ人あり其人を門の上小鏡
 成懸け置き其鏡小向合せて我室小を鏡成置
 き門成叩く者有と即ち鏡と窺ひて其容と
 認めたりと是る唯日光の返照あつて物形
 乃所々小現るゝ理るれども湯氣乃如き水氣

乃空中空小凝り集る時を鏡も同様小物の形を
空中に寫して明白小見ゆるを能く是る水
小物の寓るも同理少く委しきハ珍奇物語乃
虹乃邊邊見合とべし

今日月乃出と復没ととりたる真乃日月非
也既日月の出んとは係前より偶地平線の
上水氣凝り集る時を日月出ると映り人
真の日月或見ざるも空中に映りたる或真の

日月と思ひ眺望るら
ち空中乃水氣急散
ぶれバ其映りたる日
月の形も即ち没滅と
見えざるべし人々之
或見て其理と知とむ
真の日月出と復没と
とかかりひとる之○日



天竺 卷之七

月の没して復出るとりふも此理ふて既よ日
月山乃端ふ没とぬ後ち空中ふ水氣凝り聚ま
れば日月の形も復空中ふ映り真の日月復び
出さる様ふ見ゆはと此形り
俗ふ彼岸の中日ふハ日輪回旋りて没まとい
ふも実ふ同るふ何ぞ前道の理ふと夕陽空
中ふ集りれる水氣ふ映りて同る様ふ見ゆる
と此あり彼岸の中日ふる限ふむ春秋晴天和

暖の時も多くあるとみて夕陽暮とりふて
日輪山の端ふ及んぞ又立昇り或る山の端ふ
半輪を没して又全体を見る杯の変る空中ふ
凝りある水氣乃所為之又七月廿六日乃夜ふ
る月輪三体並び昇るあやとりふ俗言も右の
理合ふといつ乃頃り此夜ふ当りかゝる現を
見しより云傳へたるもの歎○平清盛る日次
摩き返りたりとりひ又唐の書ふ魯襄公韓ト

天変 卷之止 六

戦フ戦酣ニシテ日暮ル公戈ヲ援テ以テ魔ク
日之ガ為ニ三舎ヲ反スと云々此三舎と名ニ
十八宿のち此三宿ありん衰公一魔ニ三宿
と反トスあるもば若ク誤ト三魔四魔もせし
れ一時を春の氣も夏とあり世段中急ニ季候
乃変化生むるをん嗚呼笑ふべし此等を皆
其君の威光伐例へふりめはあると形るべし

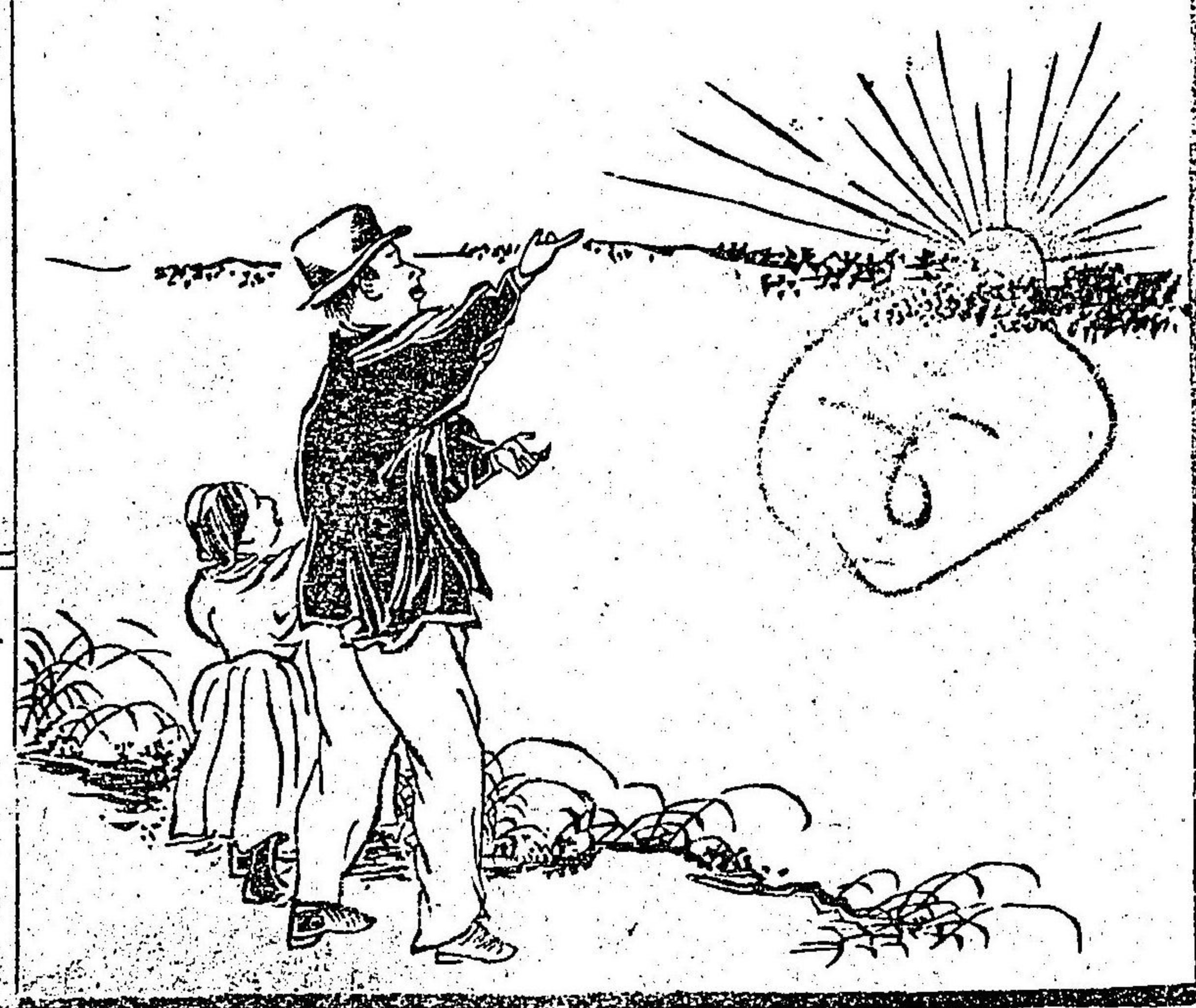
○日月色伐変むる事

日月色と変リ或る光伐失ふ等の事伐記せは
之れ唐乃書めは勝て計ふべからむ日本小由
延暦二十五年三月日赤フノ光ナク兵庫夜鳴
ル○年代紀小寛文二年三月六日ヨリ廿日迄
朝夕日血ノ如シ杯と有り又唐の書中必穆帝
ノ永和八年日暮ニ赤ク火ノ如シ中ニ三影ノ
鳥ノ形アリ分明ナルヲ見ル丁五日ニ止ム
又或書小日赤フノ楮ノ如ハ兵車野ニ満ッ赤

二二二

血ノ如ハ君憂ヒ臣叛ク色黒片ハ天子危ニ
 臨ミ天下大水アリテ民半ハ死ス抔と理由無
 く事大造ふ記一たるを此あれども日月色或
 變ぢはる皆空中の水氣日月の下小凝滞一て
 隔て其光或見るゆゑ日月色或變ぢるを此之
 春の頃朝暮出沒の日或見るふ多くな紅色ふ
 り是る地上の水氣或る山端の厚き霞或隔
 て見る故其形大く色赤きを此知る也又

鳥の形あり一空
 りある偶小惑星
 乃運行日乃面よ
 來て蝕せし形も
 ん秋日中も黒子
 或生むる折々
 有る事之又蝕る
 日月或も非也



天
 地
 人
 物

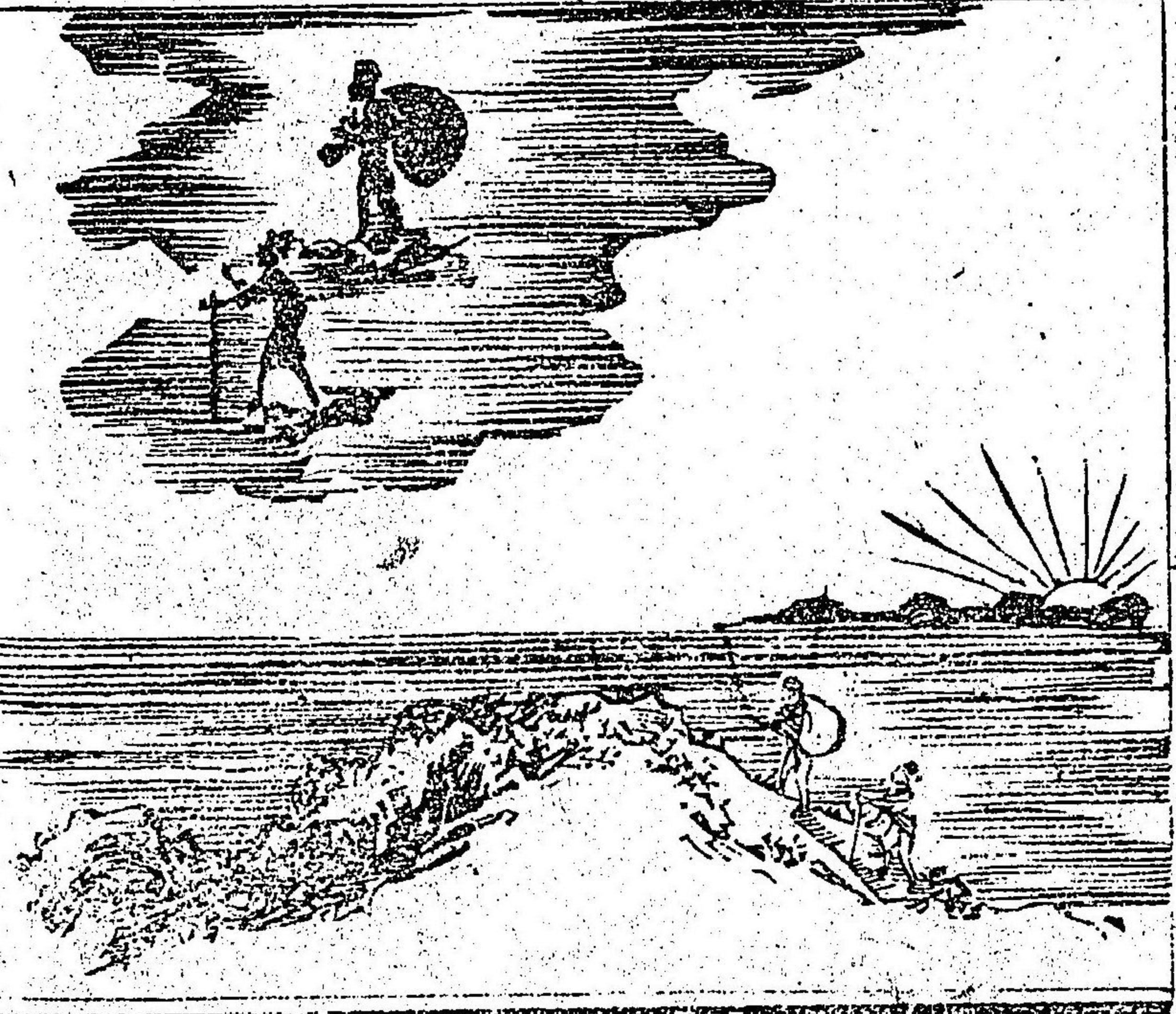
星の蝕あるを知らずと志はべし今世俗より日乃
中へ三足の鳥とかくを前よりいへる唐の各中
乃説杯より來色はあやう余其故を知らず

○空中ふ種々の像が見る事

空中ふ種々乃像を現るを前よりいへる如く空
中ぬ水氣の濃薄の所あると日光乃鏡より
空を反射る如く光線乃屈曲より現るはるも
乃めて博物新編といふ書より某國より一人

右籃杖携へ一人右杖を曳き兩人山より登り夕
陽四方を眺望むるに遠近の萬樹蒼茫とて
夕陽山端杖繞る其時忽ち空中ふ巨人二人あ
るを前よりいへる大なる物杖荷ひ後ある者
右大なる杖を授り手杖あげ足杖踏之其容子
不良杖形さうんとを偽り似たり兩人之を見て
大に駭き踵より踏み逃走りし巨入跡を追逐
しけ來り數歩ふくと没たり兩人之杖怪み

遍く村人又告ぐ
其後大勢あて再
び登り尋る小敷
日跡うさき一
夕薄暮小巨人復
現ハきつり其敷
る調度我人数
同ト由とよ目



を注て之様見る小智已乃影ありと此如く空
中多種々の形を現たしたる處中諸書小見
ゆもども決して怪むぬ足らば

蜃氣樓乃事

又蜃氣と唱へと蛤の中より樓臺宮室杯の如
影を空中小吹出したる画状かき或る神仙乃
幻境とぞあるひる龍宮あり、唱へる由を
疑ひ以生し惑ひ以起む婦女子も何ん是等

の如き空中乃幻像を皆日光乃返照と空中の
 水氣より現ハるゝを結めて亞非利加洲乃沙
 漠中杯ぬは暑中炎熱の時度々見るを結あり
 是る熱氣嚴くして土地に近き空氣稀薄くは
 且空中に昇れば地下の萬物を爰に寫すを結
 形り埃及多國を多は亘り數百里の沙漠を
 至る數十里乃間水草乃有る所もあく只二三
 の丘陵ありと野民あり小旅宿を大陽の昇る

時る地面甚だ熱
 きはぬより陽炎
 多て數百里の間
 全く洪水に覆は
 ら、よふ不見え
 其間ぬは丘陵の
 像を寫して恰も
 水乃之に続るが



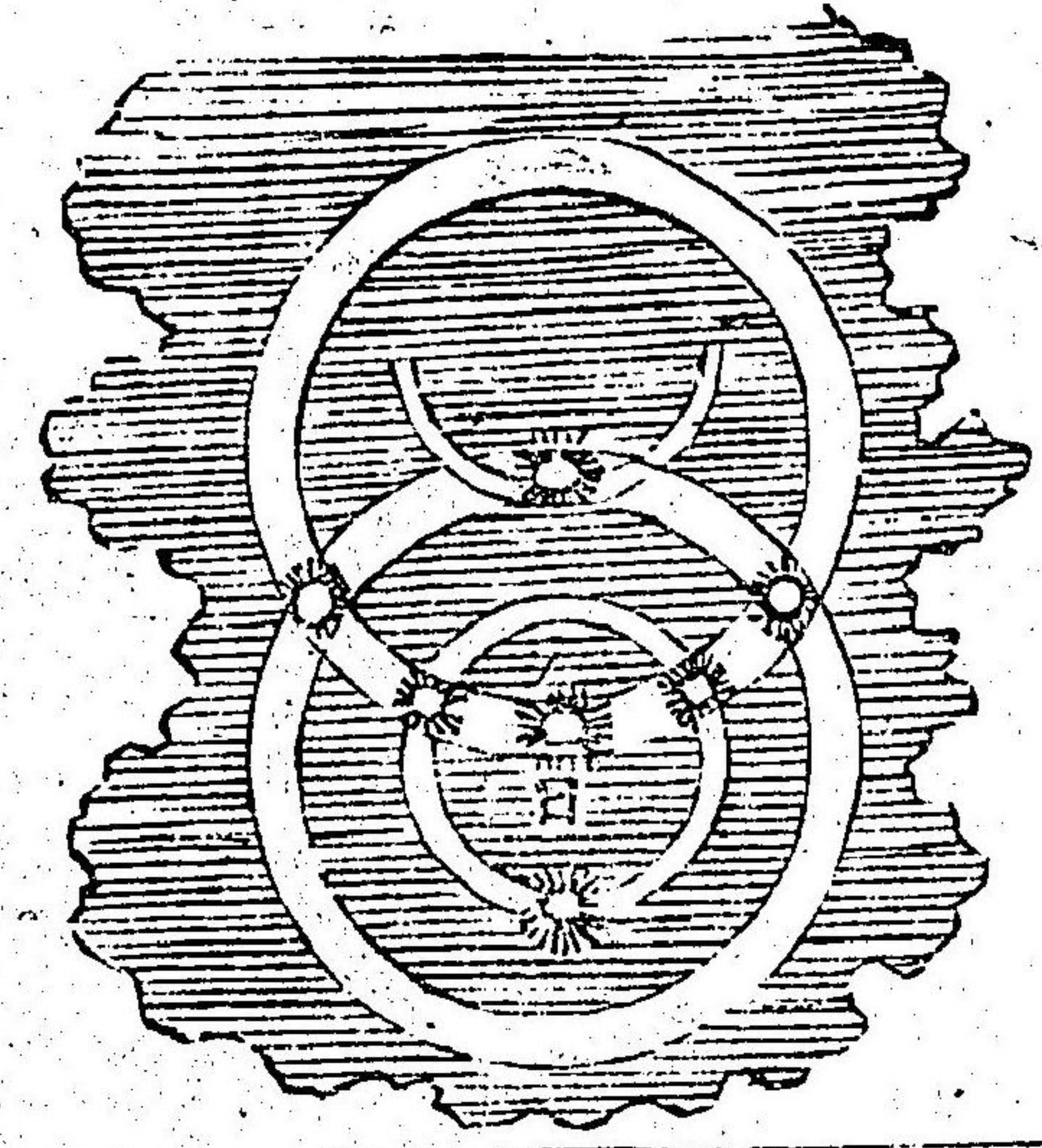
如く見ゆるをせり人なる之は其怨より
到り水を飲んと急ぎ行く跡形あり愈々進
めば只焚て熱せる地のを遠く之を見る時石
水天に連り樹陵乃水に落る姿ある由是往古
仏朗西乃軍勢此國を攻し時此幻像に迷ふて
大小難義せしをせりといふ

○同時少数日出る事

前ふゆのへる如く日月同時に六七休も天に
現れり共輝きしとて擧て教ふべからば
日本乃書ふも保延九年十二月五日三ノ日並
出又長祿二年正月廿九日兩日出ツ寛正元年
正月三日出其外右等の類猶多しと今今ツ
を畧を唐土の書ゆも堯ノ時十日並出テ草木
焦枯ス堯羿ニ命ノ仰テ十日ヲ射テ九鳥ヲ中
ツ皆死ノ羽翼ヲ墮ス抔とあり十日並出るハ
間々向きとも射て落るはよあり射矢乃行

あつと終百歩ふは紅ず入鳥とりふるなる何故
款日此中ふ三足の鳥ある乃諺よふりて日の

あつと城鳥とりふる
るあや皆固より信
むあふ足らば日輪
三四体も現をあら
る真の日輪ふり
ど空中ふ水氣多く



凝滞し其模様ふよりては日輪乃周囲ふ三重
四重の暈發生むはこせあり其時よハ其重る
りたる処へ日輪映ひ水氣愈々濃きと知る其
映ひ愈々何きかありて互ふ日形映反映し
真ふ日輪の如く数体同時ふ出さる様よ見ゆ
るあつとり例へバーツの燈火も六面の目鏡ふ
て見れば六つ見ゆるが如し月乃三四体同時
ふ出るやりのも此理あり由て今又城畧を

○天より石乃墮る事

唐土乃書小墮石のあと以記せるを此挙て數
ふべからば僖公十六年春正月石ヲ宋ニ墮ス
一五ツ杯と有り又日本もても年代紀其外の
各も寛喜二年奥州ニ石降一兩ノ如シ杯と
あり其墮石を西洋も所々ふ所をて當時に
此石以博覽會小出萬人見物さる處と以
あり其石を地上より尋常の石乃様あれど

も少しく色黒く以碎きて吟味を爲み全く
地上乃石と質を異めたり此墮石より種
々乃説ありて或る月の世界小何る火山より
噴出を爲りて飛んで我世界に來る共り以
又る極小き土塊の如き惑星乃空中以運動
て我地球乃近傍以過ると此地球の引カ小引
寄せられ直ち小地に落るりはともり以又
燐素空中小昇りて燃へると後ち其かきハ越

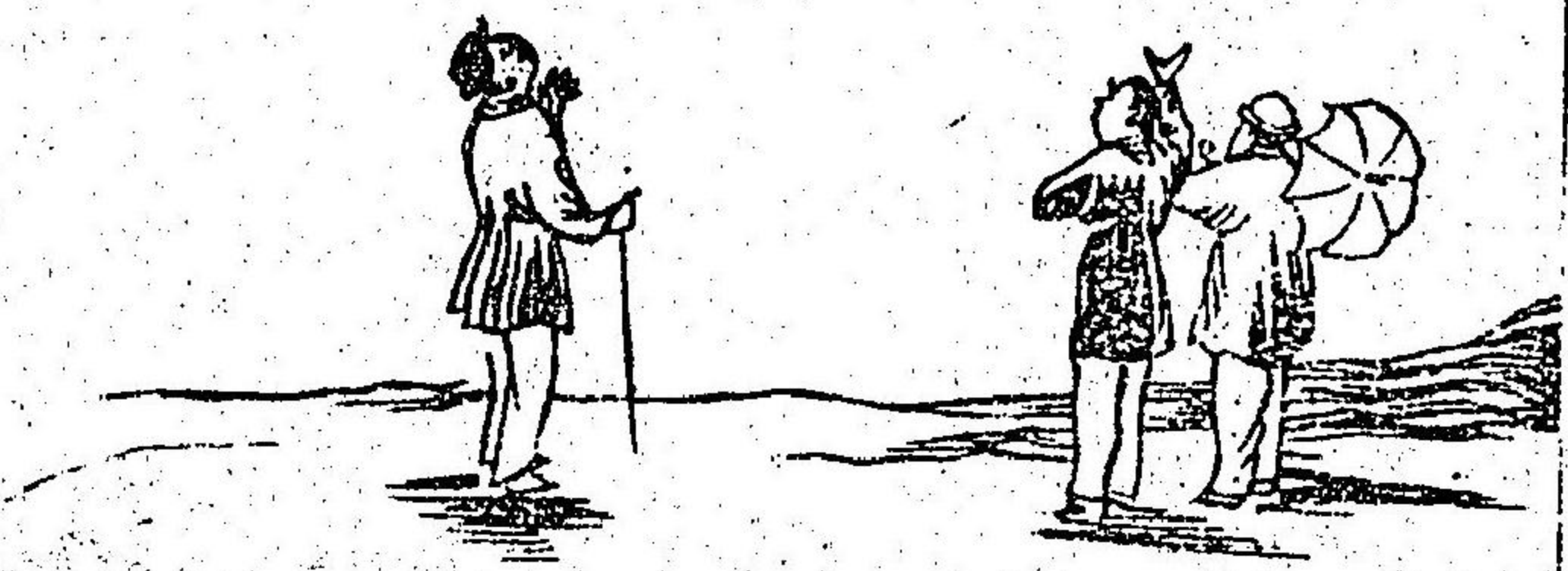
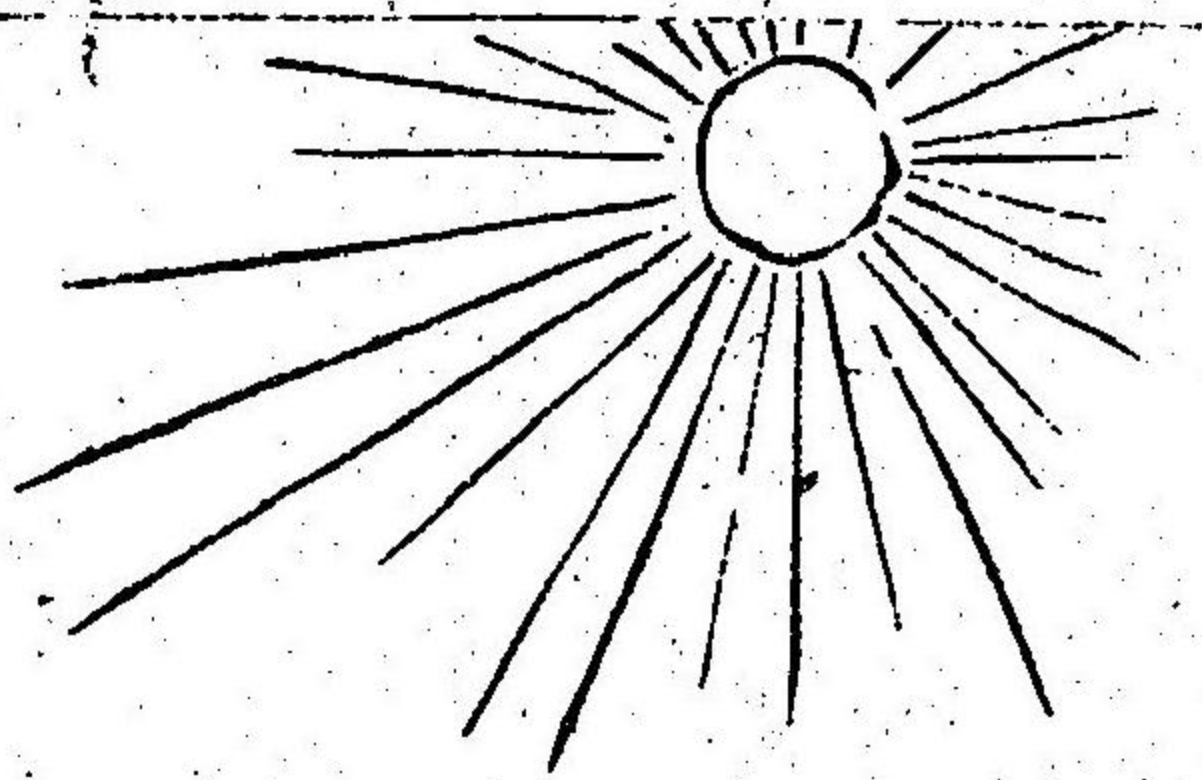
歴の為小固結まをて石の如くありたるを純
もあべ〜と其説を一樣形とざんども決し
て不思議の物めは何とぞはべ〜

○天雲ふ〜と響鳴る事

漢書も武帝泰山ニ封ズ是歳雍縣雲ナクシ
テ如雷者三或ハ飛鳥ノ如ク声四百里ニ聞ユ
杯と何り又續日本紀も天平十四年十一月
大隅國空中ニ声アリ大鼓ノ如シ其外三代実

祿とりふ書ふも是等の事或記載し其外所々

不見ゆれども
是ら皆星の如
く体あるを以
中天或飛行き
響とをよとを以
あらん極小を
る惑星の類白



天竺

登のぼる空そら氣き中ちゆう以もつ飛と行ぎやうせバ空そら氣きをか考かとび其その行ぎやう
跡あととつ填みりんとと響ひび鳴なるまとと雷かみなり鳴なるまのし條じょうふい
へるガら如ごとく猶或あるる越歴えきの働きもとり為なるべし
々らのり

○白しろ登のぼる星ほしの現あらる事こと

唐たう土どの書しよ曰いひ日光にかりナクシテ星ほし月げつ光かりアル者ものハ天てん
下か安やすカラズ天子てんし正ただス「アタハズ」ははくと日本にほんの
各おのの星ほしの白しろ登のぼる現あらるれしとと然しか記しし或あるる

吉きち山さん抔もと唱なへとるまとも見みゆきとも元もと來きた星ほし
月つき右みぎ暗くら休やすふて日ひ輪りん乃すなはち光ひかり燄えん假かりて輝かがくを此こゝあり
昼ひるハ日ひ輪りんの光ひかり盛さかふるゆゑ其その明あきと奪うばはれて
光ひかり形かたちも偶ふ天てん氣き晴は朗らうの時とき分ぶん日ひ輪りんの下ニ游あそ氣き
何なにつまりて日ひ乃すなはち光ひかり薄うすき時とき星ほし月げつ乃すなはち形かたちを見み
るべし月げつ輪りんの昼ひる見みゆきは敢あて珠とりかとび
去されども夜よ乃すなはち如ごとく光ひかり明あるまるゆとも唯ただ其その
形かたち象さうと見みるまとも星ほしる猶然しかり今秋あき冬ふゆ蒼あざ天てんの朗らう

天てん長ちやう 卷まき之の上うへ 一いち十六じふ六ろく

晴る時分洞井ふ入りと井戸の底より天
 視る時るのきつとふ星月の形を見る
 星の光り日此光を奪えぬ且井中の
 濕氣残隔て見る故あり例へば眼鏡を隔て物
 を見る小明らあるが如し

○流星乃事

往古より唐土乃冊子小流星のあと
 其外数書小流
 星のあと
 多くる皆凶と
 去はども流星落

年九月夜流星長
 サニ丈アリ光照
 レテ赤シ四漸シ
 テ散ノ宮中ニ墮
 ツ其外数書小流
 星のあと
 多くる皆凶と
 去はども流星落



天
 地

星隕石は皆一物なりん隕石の所ををよりん
る如く日輪の周囲をハの惑星あつて繞る
をれども其外も大小の彗星や極小なる
星の數限なく皆日輪と繞るをれあり其繞る
間地球の近くを來り空氣中を飛行せば空
氣と摺合ひ光を發せんと火打と石との摺合
よりの火發せしが如くあるん又極小なる
彗星は空氣中を飛行をばことなり或は初

編妹火の処ををりへる如く燐素の空中を昇
るを酸素のさめを燃るをれも有りて
流星も大小色々の種類あり又夏秋に星は
多きをけり小惑星は行道調度夏秋に地球
に近づく且夏秋に熱氣のより地を燐素の地
より蒸昇るものと多きを名有り

○星の隕る事

唐土の書に星乃隕るをを記せるを此実

教あるべからば或る某ノ國ニ星隕ルコト雨ノ
如シ化シテ石ト為ル杯と有り日本の冊子
も亦多し是等皆前小いへる如く小惑星
乃地小落る時其光を見ざる由も有るべし又
右小惑星乃飛行中地平線の下小行くり或る
山の端小隠る時右地小落る様小見ざる
ん近江八景ノ行田乃落テと有り由テ地の
落る小あはれ遠く去テ地小落る様見ゆる

由跡あり又雨ノ如シと有り其時空中小水
氣凝テ光輝然出々小映ト一星も百星の如く
小見たりは多し
星乃流動を多事
星乃流動せしと数々古書小見えたり日本
年代紀由天文二年十月八日曉キ万星半天
ニ流動シテ海陸ニ落シと有り衆星の流行動
揺り或る散乱を有る由ハ偶晴天小風あり

天変

卷之七

七

夜に見る星
 あり是れ水気空
 中凝る風の為
 動揺する時衆
 星も茲に映ひ其
 形も共々動揺し
 正眞の星乃動揺
 多様に見えと



るも此れあゝん晴天軟風乃夜水面に臨みハ星
 月水面に動揺をば以見るべし是空中乃水気
 小映ひて動揺するも水面に映ひて動揺をば
 も其理を同トかゝん

○北光乃事

北光とる夜中南北乃極に近き天に輝く所の
 現象なり去きとも我國共々支那西洋等北半
 球の地位を有る北光を見れば之南光は見る



ありし故是は唯北光
 と呼ぶ唱へ那威イストラ
 ンド。西別里等北方の國
 々お於てる尤も通常不
 て冬の長夜は照し北極
 地方乃國々ふ利益はる
 とありと擧てゆひ雅し

千八百三十八年九年乃

冬「ラブランド」の内「ボスユップ」とりふ所にて西
 洋人目撃せる處の現象は尤もりせん
 通常「ボスユップ」乃北方は夜お入りて地上乃
 半空は霧は生じ其上際又雲を生む然る時ら
 此光甚だりきららふして画乃如き白き黄色
 乃弓形は現し忽ち其下端は薄黒き傘の骨乃
 如き模様は生じ或る速く或る遅く或ハ長く
 或ハ短く其光輝も或る増し或る減し其形ち

千變万化極り形去きや由其上の元大抵
形と変ぜむ其色赤く中程小至と緑くそれよ
り末小至と次第小薄く輝きける黄色放
つ此現象何乃原由より生むる古より之
試知るも此より千八百五十九年仏朗西其外
乃國々み種々経験く見る小多く傳信機乃
銅線小働く試見とりと之小由て其理を考ふ
せば其起因る全く地球の磁石力小拘り其

働る越歴小関もあを此や

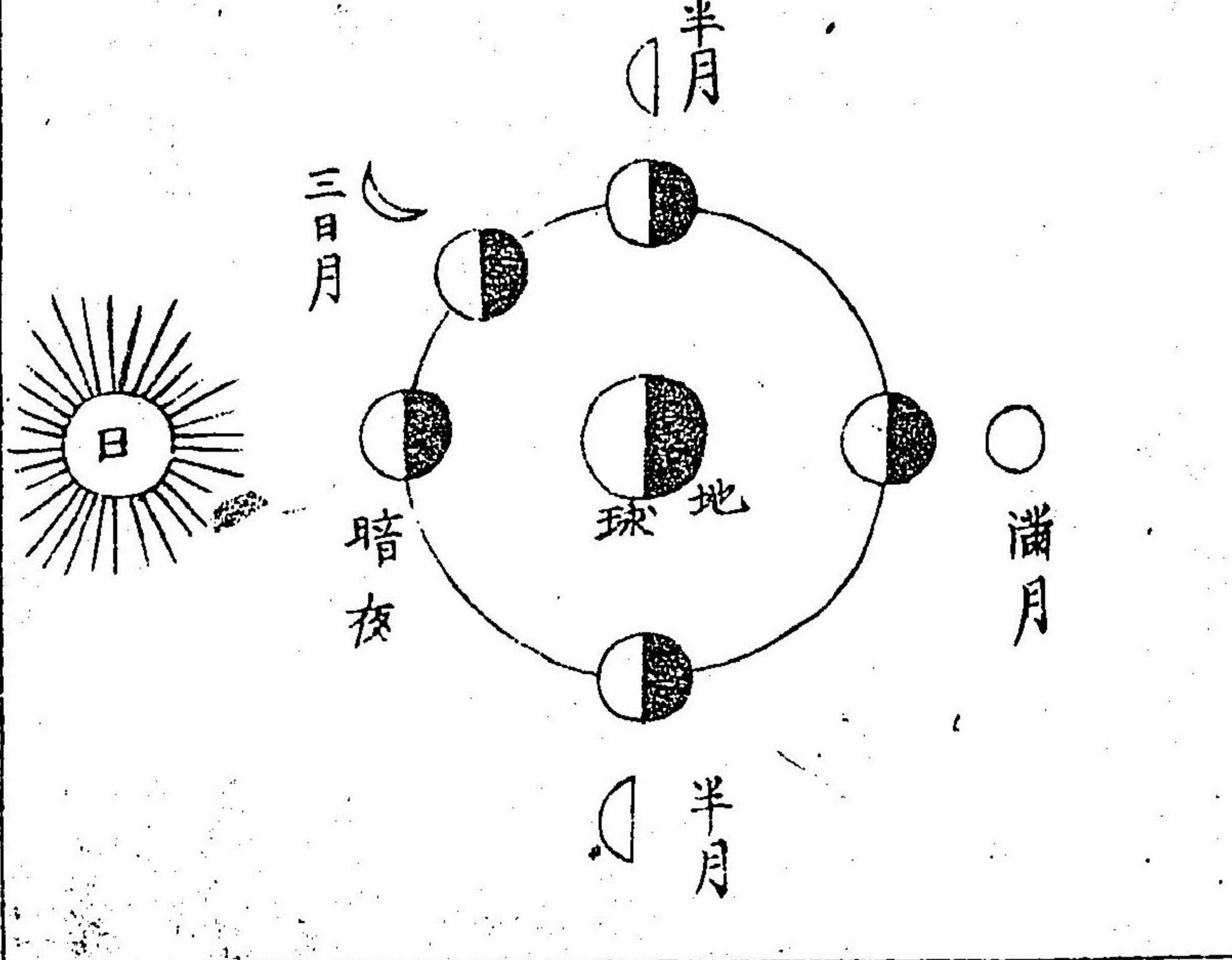
又「デレリー」リブといふ人乃説みは大氣の陽
の越歴即チ積極と地球の陰乃越歴即チ消極乃間の北
極地方小発する處乃越歴の流動を係と試小
関もはとりへり

○日蝕月蝕乃事

古ら日蝕月蝕乃起る原由試知るは蝕よ逢ふ
毎小種々の説試唱へ唐人る月蝕と月難小

以日蝕人君德滅失ふ由象を垂是警戒
 示をせ給と一家家太鼓をうち鑼を鳴一或は
 火を焼き朝廷よかおても神社小祈禱一上下
 相喧しく又羅馬人ハ其光を戻一返さんと大
 小火を焚一と又或は日月蟾蜍小吞る一や一
 各大声吠発一又天よ向つて小鏡を放ち共一
 之救あると忘説実小極りね一夫れ日月乃
 蝕る一定の期ありて今之蝕曆小記一萬民

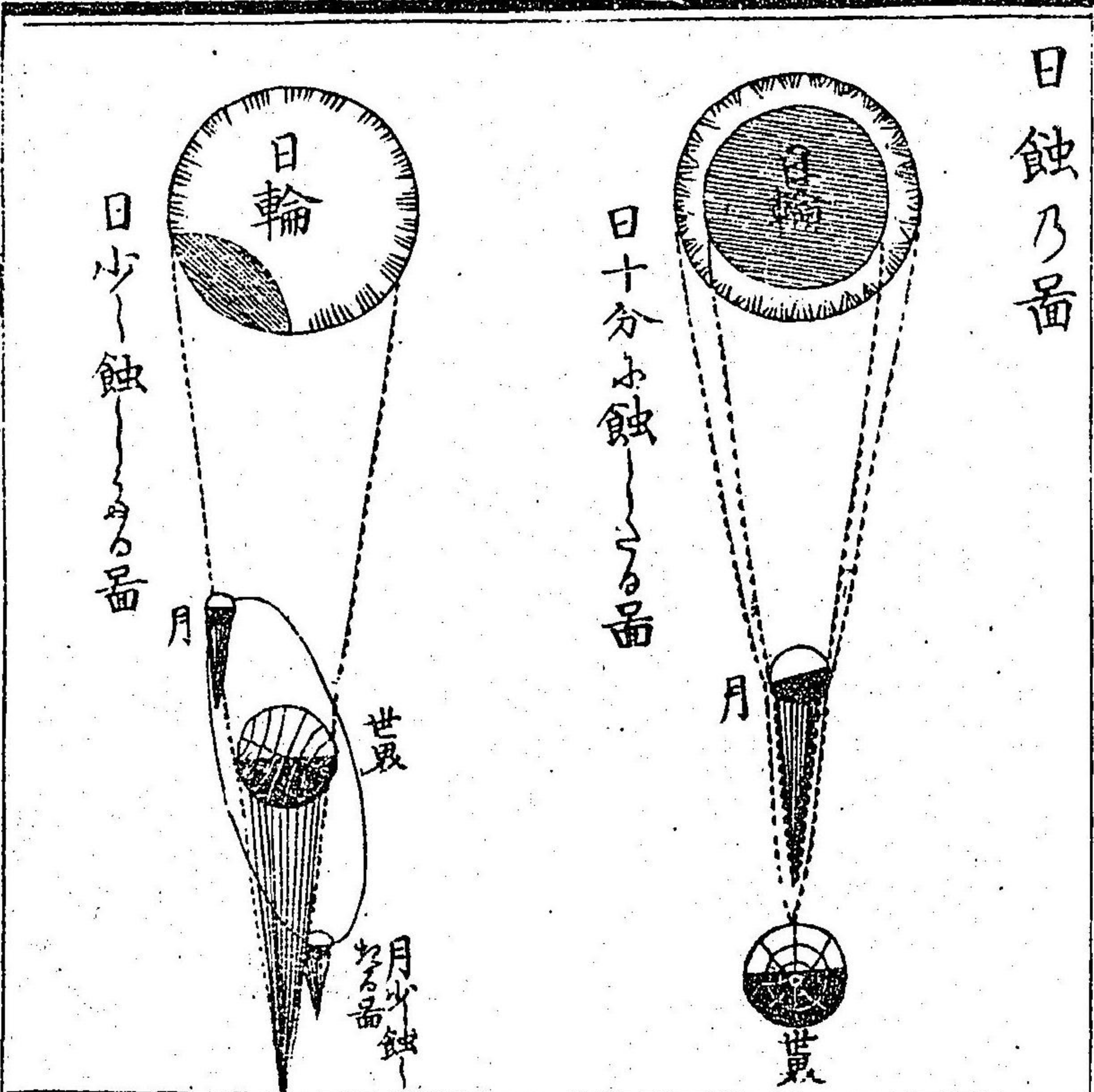
小示せる故童蒙女
 子と虽由之災災異
 空せば月ら此世界
 小附属くさる星よ半月
 と凡そ二十七日半
 をかり小此世界の
 周囲成廻りほる本
 乃処小帰る是則ち



天変
 卷之七
 七三

一月あり月をまきや暗き体めを光あり其明く
 見ゆるる日輪の光を受けて之は世界に寫せ
 ばあり前の畚乃如く月が日輪と世界との間
 に来る時る月此裏側で見ゆるる月の光明は
 見る少なり是は暗夜といふ又月がだんく
 廻りて此世界が月と日輪との間に来る時る
 月乃輝きよる面は此世界乃方に向る故其光
 を此世界に寫す則ち月夜あり斯く月が此世

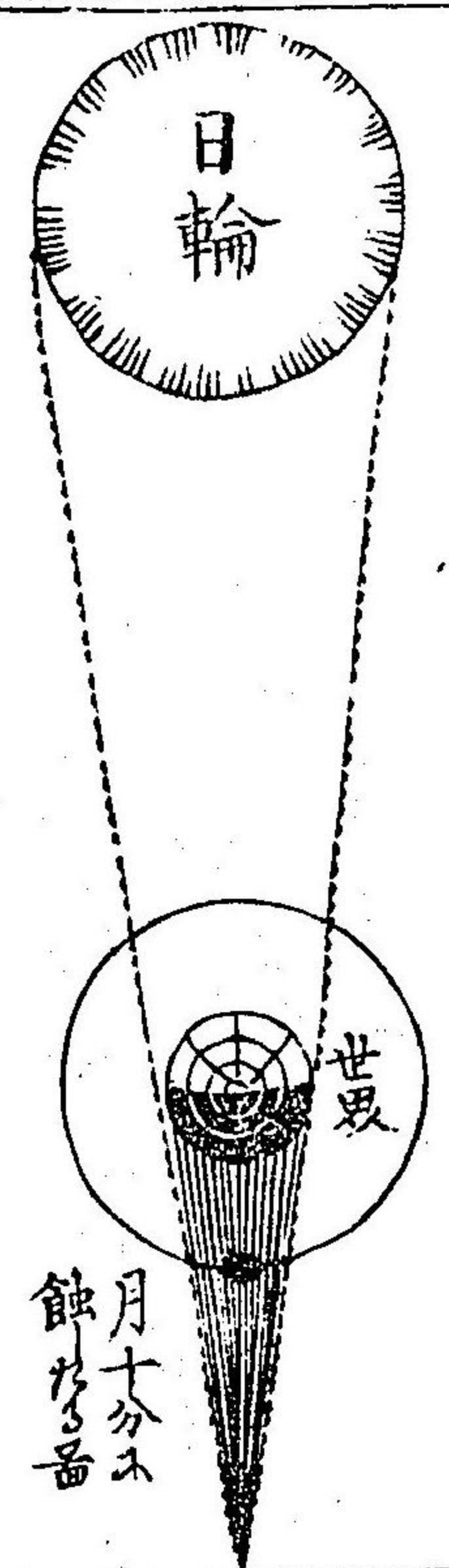
日蝕の畚



界は廻り或
 る半月とな
 り又満月
 となり又
 暗夜とな
 ○右乃如く
 月が此世界
 を廻るうち

天
 卷六上
 日
 卷六下

一月いちげつ小一度いっどづゝる心こころむ日輪にっりんと世界せかいと此間このま小
 来きるあやふれば或あるる月の陰かげめて日輪にっりん乃光明ひかり
 然さ妨まげ白昼ひる小日ひ乃面めん此隠かくるゝあとあとなり是これ然
 月蝕げつじやくの番



日蝕にっじやくとりふ
 ○又一月いっげつ小
 一度月いっどげつと日
 輪りんとの間ま小
 世界せかい乃挾さま

るゆゑ其時そのときる世界の陰かげめて日此光ひこのひかり然さ妨まげ満
 月げつと覆おほふと中なかなり之これと月蝕げつじやくとりふ只上ただうへの番
 然さ見て一通考いっとうこうふと毎まい月晦げつご日朔じやく日乃頃ころは
 かるゝ日蝕げつじやくありて十五六日頃ごじゅうろくにちころ必かならずら
 月蝕げつじやく乃有あるべき様さま形かたちもとも月の行道ぎやうだうと世界せかい
 の行道ぎやうだうと平直へいぢくなりと若もし繪えみかたに見みる
 様さま又平直へいぢくあれど毎月まいげつ日蝕げつじやく月蝕げつじやく乃ある理りあり
 去ききとも互たがひの行道ぎやうだう高低たかひ斜しやり小行違あきちがひ有ある

天あま変へん 卷まき之これ 十五

故蝕せざはあとも多し唯稀は行道の廻り合せ
みて日輪と月と世界を團子以串ふさしとる
如く三体互に重なり合ふる時のみ日蝕月
蝕乃あるあやと知るべし○又月を世界より
小さく世界を日輪より小さく由て世界の陰
を全く月が覆ひども月乃陰を全く日が覆ふ
能くばも亦日蝕といへども全く暗きこと
あり又通例を一年の日蝕三度月蝕二度と

稀は日蝕四五度及ぶあとも是とも月蝕
る三度より多きことありと

○日月地お落る事

唐土の冊子には日地ニ隕ルハ其下政ヲ失フ
は月地ニ墜ルハ大臣亡ビ國憂フ杯とあり
又晋書には建興二年正月辛未辰、時日地ニ
隕ッるや、真乃日月地お落るを記、様お記
しれどもかゝるは日月乃地お落つるを故

あり是れ日月出てはと没き所の理は同しく
日月没したる後ちも空中に水氣ありて日月
あり映ひ真の日月のまご中天に在るが如
く見ゆるうち其水氣遣りし地に降る時る日
月の像も共し地は降り真の日月地は落ちこ
る様み見えしを以て洋書中ふりしを其説
代見ど猶博識なる人ふ就て尋ねる

○雲あくく日光明と失ふ事

日色乃昼晦きくを唐土乃書中所々み見え
るを春秋とりし書めは后族政ヲ乱ス其ハ則
昼昏レとあり十八史略する徳祐元年六月庚
申朔ニ日蝕晦冥ナリ鷄時ニ栖ム咫尺ニ人物
ヲ辨セズ己ヨリ午ニ至テ明始テ復スとあり
はと西洋の書も往古日蝕乃日ふ当て其暗
きこや深夜乃如く星辰現ハる鳥も休し獸も
伏る愚民も之を凶變の前兆と唱へしれど

も國家平穩へいげんみしと遂ついに一變いつへんの應兆おうえんも形かたちりり
しとぞ是固これかたより物理ぶつり成なり去さるるは附會ふかい乃すなは説せうふ
り日光にっこう忽たちちひかりふ明あき成なり失なふると登あるるには成なりるる空くう
中ちゆうの蒸氣じょうき日ひ下くだふ混聚こんしゅうしと日光にっこうと蔽おほふると
ある故ゆゑなりん且かつ十分じふぶん皆既けいの蝕しやくは最もとも暗くらき
を成なりあれども人物にぶつと辨わぜざるは程ほどあはるれも
能よかりい今上いまふりしと昼夜じつやの如ごときハ日蝕にじやく皆既けい乃
時ときとまく水氣すいきの日ひ下くだふ聚ありて日光にっこう成なり妨さげと

るを成なりる去さるるも咫尺せちと辨わぜざるとは事大造ことだいぞう
ありふるを成なりるべし

○火の雨降あまの事こと

是こゝる洋書やうしよ中ちゆうふ見みざるあるる去さるるも古この
云傳いひつゑふ大古火おほいの雨あ乃すな降くだりし時ときは穴あな成なり堀ほりと住すま
居かし杯とりふ日本紀にっぽんきは推古帝おほノ九年夏五
月天皇耳梨みみノ行宮ぎやうきゆうニ居いス是時こゝ火ひノ雨あフルと
あり去さるるも天あまより火ひ乃すな降くだるる是こゝ理ことるる是こゝ

右より皇居神廟の焼る天火災とあり由
 と其意成誤り天より火の降りて焼とるを此
 と思ひより斯く云傳へたるものなり又晉書
 には君其臺ヲ高スレバ天火災ヲ為スとあり
 是る左もたるべきあり形り雷鳴の處母とい
 へる如く電氣必と高き物と撃つ由より西
 洋諸國ある高塔も雷避を仕掛りざり前
 なる屢々雷撃のとりぬ焼ととりぬ絶て天火と

唱ふるも此多かる雷火あるべし雷火の為
 家庫乃焼
 る皆人の知
 る処あり去
 きども唐七
 乃書小宗廟
 社稷ニ天火
 アレバ其國



天鼓 卷六上 九

將ニ亡ントス杯と何る是又理もる附説
あるん或る人心と慎まきめんが為ふりあそ
るあそ欣

○夏雪の降る事

日本紀小推古帝ノ三十四年六月雪フル其外
夏雪乃降一あたる和漢乃書小故奉まべり
む皆多くハ凶年の前兆とも是又理もあき事
之然一夏雪電乃多く降る時五穀小有害五

穀め害ある時ハ國の凶あるあより山事此前
兆とあなる者り去きやも爰より辨別成
付ざねど童蒙又惑と生ハ恐怖成あさん姓古
より傳聞乃誤る多く是等のあやなるべし夫
雪る空中の水氣化して雨とあらんとも是時
空中乃寒さ強くして三十二度より下るれば
其水氣る雨とあなる凝結りて雪とある
又水氣凝て一度雨とあり上より降る途中小

て寒氣かんき不あ逢あへば雨あめの滴つゆ結むすりて霰あられと形かたちる猶なほ降ふ
る間あひだ水すい氣きのあききはきバき之き不あ附ひ着きて大塊おほくわいとある之これ
と雹ひょうとりふ霰あられと多おほく夏降なつふりるを形かたちあり夏雷なつらい雨あめ
の時ときは越こ歴れきの為ため不あ空くう中ちゆう格かく外がい不あ寒かん氣きと生なまむは
ま形かたちあり由よしんて其時そのとき寒氣かんきの高低たうがひと水氣すいきの模かた様よう
ふより雨あめと形かたちるを中ちゆうあり雪ゆきと形かたちるを中ちゆうあり
或あるは霰あられとあることあり人々ひとびと夏中なつちゆう不あ霰あられ乃降ふる
る珠たまとせは只偶ただいふ夏中なつちゆう不あ雪ゆきの降ふる以もつ以もつ奇き

と形かたちせざる水氣すいき化かして雪ゆきとあるも霰あられと形かたちる
も大おほくは異ちがひ形かたちる

○天てんより種しゆ々の物降ものふる事

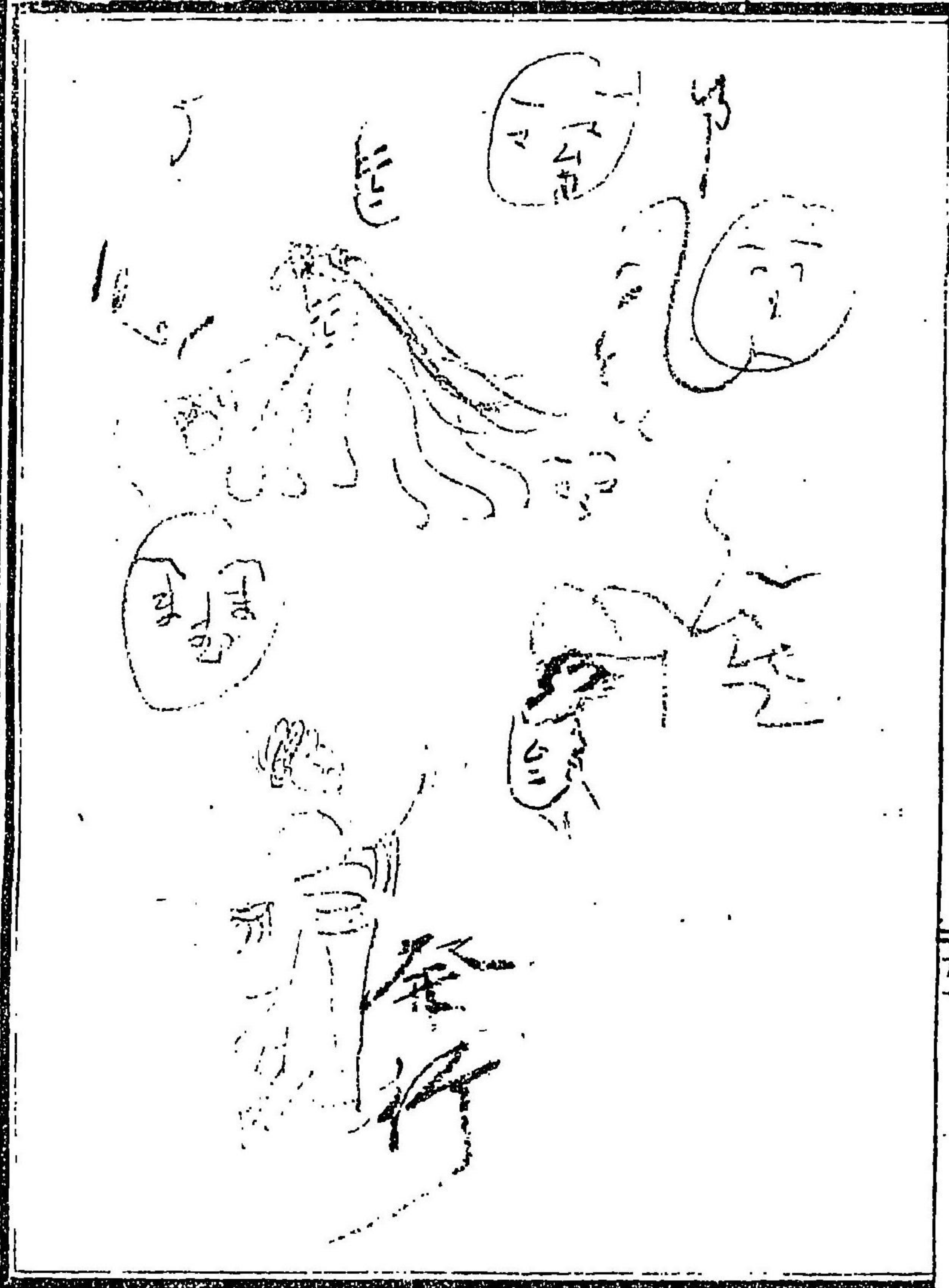
天てんより草木さうぼくの実み或あるは羽毛けふね杯降さいふりるあと古書こしよ不あ
数かずふべりとる倭俗やまとぢやくは天てんより毛けの降ふるを龍りゆうの
駒こまの毛けありを云いふ龍りゆうの駒こまとハ何者なにものぞと問とふ
雷らい乃乘のりる馬うまありを呼よび鳴な笑わらふを又また三四
年前ねんまへは各おの國くに不あ神かみ社やしろ仙せん閣かく乃なほ札しやくの降ふるを大

小騒ぎ或る宮城建て堂城築きと祭るあり
何れぞも何ぞ天より器物紙葉乃降る理あり
んや颼風みよきて一所の各物城空中小巻揚
げ偶風小乗て一二里或る四五里乃所よ至て
落るありとほりあることなり又龍巻小よりて
魚類水と共に空中小揚り遠く他小落るあり
あり又十八史畧にも「天書降ル」アリ杯と
何れぞも是る王欽若とりし者真宗とりし者

と謀て夷狄小誇り示さんぐ為小偽て作し
能ありと凡そ世乃奇変る皆其本虚偽の妄を
る城後傳と事城添へて書小記し言小傳ふる
ゆゑ虚小虚を増して終に實と形を去と一般
乃曰習ふり各よく意城注け根み妄言と吐出
空形くれ

天長寺談卷之上終

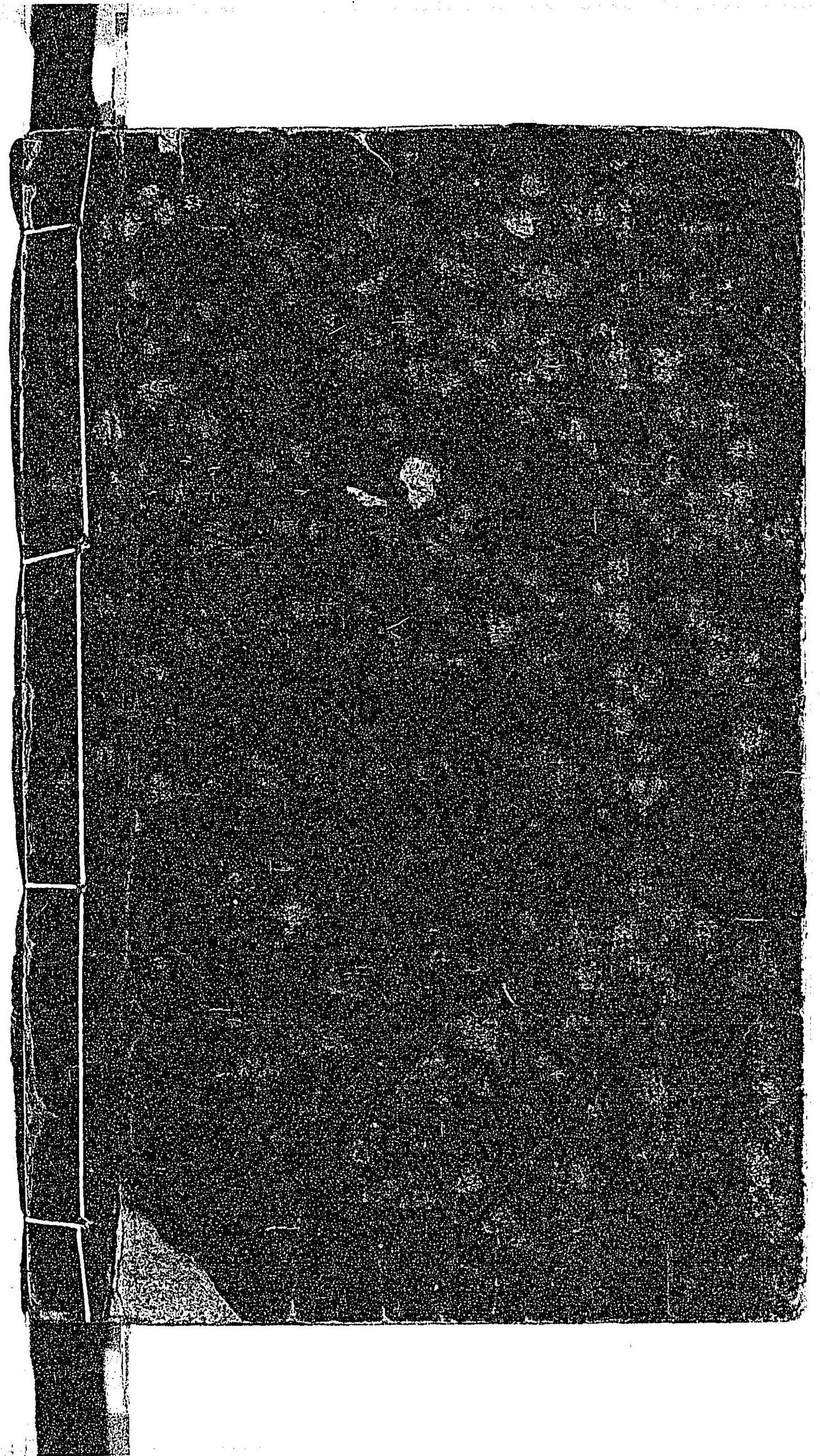
Tokyo Library.

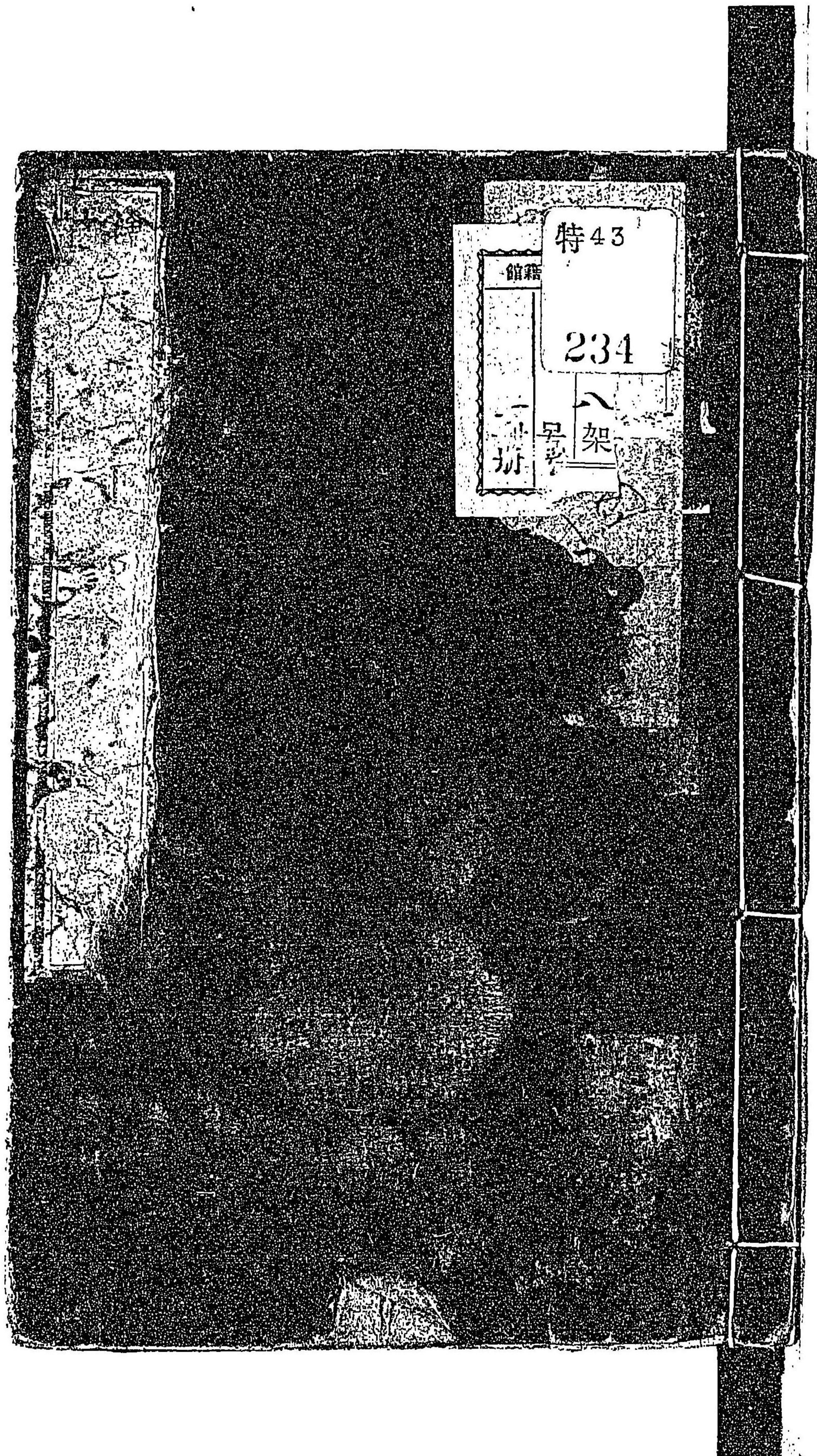


天
卷
三

東京圖書館

梅
天
屋
記
あ
地
記





052890-001-2

特43-234

天變奇談

東江樓主人／著

上

M6

CAA-0210

